

拝啓 「住友ビルの展望台から見たあの夜景」様

“あなたという景色は、私にとって『初心』かもしれません”

まだ東京に来て間もない頃、この世界で売れるかどうか自分の心の中では自信があつたのですが、結果としてそういうところまでちゃんと自分をもって行けるか不安だつた頃。私はことあるごとに、あなたという景色を見に行つたものです。三十何階だつたか四十何階だつたか忘れてしまいました。私はあの展望台から見えるあの夜景が大好きでした。東京という所を、一面に見渡せるようなあの夜景が大好きでした。何故、あなたという景色をそんなに見に行つたかという、私の夢であり、私の目標でもある、自分の将来の仕事にしようとしているお笑いタレントという仕事の、その素晴らしさを感じるために行つたのです。こと、東京という限られた場所だけであつても、あの展望台から見ればもう、それは恐ろし

いぐらい、数えきれないぐらいの灯りが見えるわけです。そして、その灯りの下には、たくさんの人が住んだりしているわけです。そしてそこには、テレビが必ずあったりするわけです。私がもし売れて、どこかのスタジオで収録したりしたものが、一斉にしてその数えきれないような灯りの下で、たくさんの人に見られたりするわけです。例えば私がその日、そのO・Aの時間に、どこかのスタジオのおねえちゃんのケツを触りながらスケベ心を丸出しにして、そのおねえちゃんを口説いていたりしていてもです。自分の仕事の成果が一瞬の間に、その時、その本人が何をしていたように、そんなことには関係なく、あの数え切れないような灯りの下で流れてくるのです。そしてそれがいい仕事だった場合、そんな私に関係なく、私のやったことに笑ってくれたり、おもしろがったり、世間の人が一喜一憂してくれるのです。その分、私にとってマイナスなことでも容赦なく、たたかれたり、さらし

ものになったりするわけですが、それとてあの頃の私にとってには、望むところでもあり、一種の憧れてしまう世界でもありました。私は素直に私のやろうとしている仕事のやりがい、そしてそのすばらしさをあの景色から感じとる事ができたのです。そして、それを感じたいがために、ことあるごとに私はあなたという景色を見に行つたのです。東京という町で埋もれるようにして、そして、いつも自分が歩いている地面の高さでしか、東京という町を見ていなかったとしたら何も感じないものが、あの高さにあるあなたという景色には確かにありました。まさにあの展望台から見えたあの夜景は、不安に押しつぶされそうになった自分に、いつもやる気と、また立ち向かっていこうという勇気を与えてくれたような気がします。私はよくあの景色を見ながら当時、自分が住んでいた東高円寺あたりをさがして見ました。自分が現在生活している場所や、遊び回っている場所を東京全体の大き

さから見比べるためにです。そして、私の生活している場所なんて、東京全体の大きさからすれば、ほんとうにちっぽけなもんだとか、そこにあるイヤなこととか、つらいこととか、そんなものは東京全体の大きさからすれば、それがいったいどうしたんだと言わんばかりのものだということ素直に感じたものです。そして、もし、そういうちっぽけな所で、自分が不安になったり、そしてそういうものに押しつぶされそうになったりしているようだとするならば、自分のやろうとしていることなんか、絶対かないっこないと自問自答し、そしてそんな自分をいつも勇気づけ、やる気にさせていたような気がします。あの頃の私にとって、あの展望台から見えたあの景色は、私の心の大きなよりどころでした。たとえ見に行くことが出来ないような時でも、何かあった時、よく私は頭の中であの展望台から見えるあの景色を想像し、勇気づけたものです。今、私は素直に、あの頃見たあな

たというあの景色にありがとうと言いたい気持ちでいっぱいです。自分の夢をかなえることができるかどうか、そんなことでいつも不安になっていた私を、そして、実績とか才能という部分では、まだ海のものとも山のものともつかなかった私を、あなたは差別するでもなく、それよりもまるで私に味方してくれるかのように、何も言わず、いつも同じ景色を私に忠実に見せてくれました。そして、私が帰ろうとする頃には、“がんばる”とか“がんばってみるしかない”とかそういう気持ちにさせてくれました。今、こうして、ある程度の結果を残すことができ、とりあえず売れて世の中に出るということは負けなかった私からすれば、あの展望台から見えたあの夜景、そして、そこから感じさせてもらったことを抜きにして、ここまでやれたかどうかということに関しては、ちょっと語れないものがあります。暫くあの夜景を見に行ってもいいです。久しぶりに子供でも連れて見に行つ

てみようかと思っ
ています。拝啓「住友ビルから見えたあの夜景」様、あなたという景色は私にとって『初心』
かも知れません。今度、見に行く時は、景色を見るとい
うよりも、私のあの頃のそういう『初心』を見に行きた
いと思っております。そのときは久しぶりですがよろし
く・・・またこの野郎きやがったなあど歓迎してくださ
い。私の息子が、私の後ろで飛んだり跳ねたりしている
かも知れませんが。私は黙って静かに、気の済むまで、
あそこから見えるあの夜景を、ゆっくりと見ていたいと思
っております。

拝啓「住友ビルの展望台から見えたあの夜景」様、その時はどうかよろしく・・・